

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

水について考える

今年の冬は暖冬で、雪があまり降らなかった。去年は歩くことも困難なほど雪がつもったのがうそのようである。去年は母が毎日大変そうに雪かきをしていたことを思い出し、私は、

「今年は雪かきしなくていいから、お母さんも楽でいいね。」

と言った。冬の仕事が減って、母も嬉しいだろうと思ったからだ。しかし、母は真剣な顔をして答えた。

「雪かきしなくていいのは確かに嬉しいけど、今年の夏、田んぼにひく水が足りなくならないか心配だよ。」

私の家は稲作で収入を得ている。水が足りなくなり、米が育たなければとても困る。私の家だけではない。近所の人たち、紫波町の人たち、日本中の農家の人たちみんなが困ることになる。梅雨の季節や大雪なんてうつつうしいだけだと私は思っていた。水が足りなくなった時のことなんて、考えてみたこともなかったのだ。母の言葉を聞いて



岩手県 紫波町立紫波第三中学校

三年 藤原香織

て、私は改めて、梅雨の時期の雨も、冬の大雪も、私たちに必要なものだと実感した。

私が住んでいる地域は『水分』^{みずわけ}という。名前の由来について、小学校でも学んだのが、うろ覚えだった。もう一度父に聞いてみた。父は、二つのことを教えてくれた。

一つ目は、わき水があること。水分には、『あづまね山』という山があり、山のふもとの方から水がわきでている。私の家の水道から出る水も、このわき水だ。小さい頃からずっと飲んできたので、よくわからないが、大きな街の水よりずっとおいしいらしい。

二つ目は、昔、水げんかという水を取り合う争いがあったこと。今から四百年ほど前、水田にひく水がなくなり、米がとれなくなった。そしてさらに日照りが続き、稲はどんどん枯れてしまった。その結果、村人たちが水を取り合うことになり、水げんかがはじまった。こ

の水げんかは三百年以上も続き、たくさんの人が亡くなったという。志和稻荷神社には、けんかの時に耳が欠けてしまったお稻荷さんの像が、そのまま残っている。このけんかを終わらせるために、農業用水専用のダムがつくられた。山王海ダムである。ダムができてからは水田に水がひけるようになり、水をとり合うことはなくなった。このような出来ごとから、私の住んでいる地域は『水分』と呼ばれるようになったらしい。

水分には今も、たくさんの水田があり、稲作が行われている。昔とちがいが、蛇口をひねれば田んぼを水で満たすことができる。そのおかげで稲は元気に、立派に育つ。私の家は農家なので、それを身近に感じることができる。春、種をまく。芽が出たら毎日たっぷり水をやる。そして、大きくなった苗を田に植える。その苗が夏には三十センチほどに大きくなり、秋には穂をつけて、重そうに首をたれる。私は毎年、この様子をすぐそばで見てきた。稲の成長から季節の移りかわりを感じとってきた。水分にはショッピングセンターも遊園地もないけれど、こんなにはすばらしい田んぼがたくさんある。私は小さい頃から、田んぼがあつて、収穫した米を食べることをあたり前のようについてきた。けれども、昔は、人々が命をかけて水をとりに合っていたこと、そこからダムがつくられたことを知り、さまざまな歴史の上で、今の生活が成り立っているのだと感じた。

水分という、水が支えてくれている地域を、そして、支えてくれている水を含めた自然をこれから大切にしたい。